

北海道・小樽 埋立・保存の対立転じ「観光都市」創生

市民の思いを結集、反対運動からまちづくりへと止揚

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

1. 近代小樽の成立と運河建設 開拓の玄関港、物資の導入路

・小樽と港湾整備

小樽は、札幌の北西約 30km に位置する人口 12~13 万人の小都市である。このまちは明治に入り北海道の開拓が本格化すると、開拓移民の生活を支えるため、様々な物資を満載した、北前船(弁財船)の玄関港として発展した。

明治 13(1880)年、鉄道が小樽と札幌の間に敷かれ、港湾と結んで流通の要となると、港には木骨石造の倉庫が立ち並んでいく。この時、営業倉庫は 250 を数え、石造倉庫も 100 棟以上存在した。そうして北海道の交通の要衝、物流拠点、国際貿易港の役割を担うことになった小樽には、世界の商況を反映し多くの銀行・商社が軒を連ね、「北のウォール街」と呼ばれるようになる。

・運河の建設

そんな大正時代の 1914 年、沖合を埋立てる形で 9 年の歳月を要し、運河が造られる。この運河、**海岸線に沿って扇状に整備**されたため、この地の自然風土とよく馴染んだ。この運河は、直接、港に接岸できず沖に停泊する大型船から運河沿いの倉庫に、舳(はしけ)を介し荷を運びこむ導入路の役割があった。しかし、昭和に入ると、港には直接、大型船が接岸できるよう埠頭の整備が順次、進んでいった。こうして次第に使われなくなっていった運河には、ヘドロがたまりゴミが浮き悪臭を放つようになった。



小樽の位置



小樽港と市街



小樽運河

2. 保存運動の展開 「地域に生きる」という共通の思い、訴求力を高め支持を広げる

・臨港道路の建設

1966 年、モータリゼーションの進展に伴い物流効率化の一環として、臨港道路(延長 1,140m、6 車線)が都市計画決定される。この時、小樽運河も、その一部 680m が埋立てられることになった。道路整備の事業認可も下り工事が進み、運河の南端 500m の所まで埋立が迫った。

ここに至り市民が立ちあがる。1973 年 11 月、「**小樽運河を守る会**」が発足、「運河と石造倉庫

「地方創生」支援プロジェクト



は**文化遺産**、汚れた水面を綺麗に」として、市民運動が展開されていく。一方、経済の停滞に苦しむ地元経済界は、**港湾物流の活性化**につながる道路建設に期待をかけ、1977年に「**整備促進期成会**」を立ち上げる。こうして市民と経済界との対立は激しさを増していった。

ここで運河保存に功績のあった第2代**守る会会長・峯山富美**さんを紹介しよう。峯山さんは、小樽に生活する平凡な一主婦で、道路建設による経済活性化に異を唱え、「運河のある原風景を大切に」「先人の築いた資産を残そう」と訴えた。峯山さんは2010年に96歳で永眠するが、峯山さんが生まれた1914年は、奇しくもこの運河が建設に着手した年でもある。運動は、峯山さんはじめ中高齢者が主体となり、「凍結保存」を求め取り組まれた。それは皆が「**運河とともに、その時代を、この地で生きてきた**」という、共通の思いがあったからである。どのまちの**風景も、そこに生きる人々の人生と対になっている**。

・道路建設反対の意思を行動で示す 心の叫びを体で表現

市民運動のリーダー・峯山さんは、埋立ての杭打ち工事が始まった時、現場に立ち声を限りに「**止めてください〜**」と叫んだ。あのソビエト連邦崩壊の時、エリツイン（後にロシアの大統領となる。）が戦車の上に立ち叫んだように、その訴求力は大きかった。峯山さんは、仲間と運河を清掃したり、イベントを開いたり、また保存活動の**ニュース**を流すなどして活動を続けた。

その後、若者や学者などが加わり、運河をまちづくりの視点から捉えるようになり、舳に乗って生ビールを飲みロックを聴く、**ボートフェスティバル**を開催するなどして活動を進めていくと、市民の関心も高まっていった（動員目途3千に対し3万人が集まった。回を重ねると20万人にも達した。）。また、石造倉庫を活用し**ギャラリー**展示や**シンポジウム**を開催するなどして活動を広げていった。そうした動きの中、小樽市民各界各層から百人委員会を結成し、1983年に**署名活動**を行うと市内で約10万人の署名が集まった。

○保存に向けたマスコミ戦略 メディアの活用、運動を支援

長く続く保存運動、その状況を地元の新聞を始めマスコミが、「小樽で、何かが起こっている」として、全市、全道、全国へ報道してくれた。そのおかげで、小樽運河には全国から熱い視線が注がれ、市も道もそして地元経済界も運河の保存に目を向けざるを得なくなった。

小樽運河の保存と観光まちづくりについては、**北海道新聞**が1975年2月～1986年10月までの間、全道版に記事398本、社説14本も掲載した。市内版に至っては、この4～5倍の記事が紙面を飾った。圧倒的な数である。また、この間の1976年には、小樽を舞台とした倉本聡原作のテレビドラマ「**幻の街**」も放映され、「小樽＝レトロ」のイメージが世間に醸成されていった。

・運河の保存と景観の修復

こうした運動の盛り上がりと広がりの中、市や道が地元政治家や経済界なども交え協議を進めていった。その結果、結局、足して二で割る形で決着が図られた。即ち、1980年、事業主体である道は、北運河を残し運河の半分は埋め立て、臨港道路に沿い幅員20m（当初計画の半分）・延長650mにわたり、散策路を整備する形に都市計画を変更、水底のヘドロも固化し水質浄化を

「地方創生」支援プロジェクト





小樽運河報道



旧日本銀行小樽支店



北一硝子三号館

図ることで工事を再開、1986年には事業を終えた。こうして運河沿いの散策路には63基のガス灯が設置され、「レトロ小樽」と呼ばれるようなロマンチックな風情が醸し出された。

3. 観光まちづくり 地域資源を活かす

○歴史的建造物の活用 コンバージョン

小樽では、運河論争を契機に、市民の間に「まちづくり」の意識が芽生える。市も、この市民意識の変化に呼応し、昭和55(1980)年「歴史的建造物及び景観地区に関する調査」を実施、翌年には「小樽運河とその周辺地区環境整備計画」を策定、これを受け「歴史的建造物及び景観地区保全条例(同58(1983)年)」を制定する(その後、この条例は、眺望景観の確保等も含め「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例(平成4(1992)年)」となる。)

市は、この条例に基づき、まず31棟の歴史的建造物を指定する。その多くは旧日本銀行小樽支店(現金資料館)、旧日本郵船小樽支店(国重要文化財)など「北のウォール街」時代の産業遺産である。これらの建築物は、現在、小樽運河とともにライトアップされ、小樽の歴史や文化を味わうことができる。ランプや手づくりガラスで有名な北一硝子三号館も、この時期に歴史遺産を活用しオープンした建物の一つである。

○観光振興のためのフィルム・コミッション戦術 映像効果

保存運動を終えた峯山さんは、求めに応じ語り部として全国を講演して回る。そこで語られた小樽運河保存の理念と手法は、保存運動からまちづくりへと止揚するモデルとなり、東京駅・赤煉瓦駅舎の保存にもノウハウを提供する。小樽は、その後、テレビドラマや映画のロケ地になったり、雑誌アンアンやノンノで紹介されると、全国から、またお隣の韓国や中国からも観光客が大勢訪れるようになる。マスコミ報道とりわけ映像の影響は大きく、人々の心を揺さぶり小樽が運河保存から観光都市の創生へと止揚する導火線の役割を果たした。そして2003年にはロケの誘致、撮影協力を主体的に行うため、フィルム・コミッションが設立される。

そうして観光客が大勢訪れるようになると、崩れかけた木骨石造の倉庫もコンバージョンされ、内外装ともに手が入り美しくディスプレイされ、土産物(ガラスにランプ、オルゴール)屋、ギャラリー、飲食店舗などとして活用されていく。そうした店舗の中でも特に人気を集めているのは、「小樽オルゴール堂」である。約3,000種類ものオルゴールが並んでおり、お土産として飛ぶように売られている。この他、小樽運河の裏路地には、有名な「北のアイスクリーム屋さん」

「地方創生」支援プロジェクト



もある。「うに、いかすみ、じゃがバター」といった、北海道の味覚にはじまり「塩、納豆、わさび」といった標準ものまで、20種以上のユニークな味が楽しめる。



オルゴール館 内部と外観

小樽市街マップ

4. 通年、観光都市化 冬の風物詩を生み育てる

この地の観光入込客数は、昭和 61（1986）年度の 273 万人から 15 年後の 2001 年には 893 万人へと、実に 3 倍以上にも伸びた（現在は 710 万人）。小樽市の人口が約 12 万 5 千人であるから、人口の 50 倍以上の観光客がこの地を訪れていることになる。

○イベント「小樽雪あかりの路」の開催 ボランティアの活躍

観光都市に育った小樽の悩みは、冬季に観光客が減少してしまうことにある。市民も外に出たがらないこの時期に、なんとか集客を図れないものかと、官民一体となって議論をつくり、平成 11(1999)年にイベント「小樽雪あかりの路」が誕生する。厳寒の 2 月、運河の水面には約 400 個の浮き玉キャンドルが浮かび、散策路にはスノーキャンドル・オブジェが設置されるなど、小樽全体が 15 万本のろうそくの温かなあかりに包まれる、そんな幻想的なイベントである。イベント名は小樽ゆかりの作家・伊藤整の詩集「雪明りの路」に由来する。

このイベント、スノーキャンドルの製作から、ろうそくの点火まで、ボランティア（海外からの参加も含め延べ 1,600 人）の手作業で行われている。このイベント、今日、北海道の冬の風物詩にまで成長、平成 18（2006）年 3 月には、地域活性化センターの「ふるさとイベント大賞」を受賞するまでに育った。これは「小樽運河」の景観保存から通年観光に向けた、小樽市民の持続的努力が高く評価されたからである。

なお、観光都市・小樽創生の原点、運河保存運動の立役者・峯山富美さんは、2008 年に日本建築学会文化賞を受賞、これを記念し「地域に生きる」と揮毫された碑が北運河にたっている。



雪あかりの路



北のアイスクリーム屋さん



日本建築学会文化賞受賞記念碑

「地方創生」支援プロジェクト



参考資料等

小樽雪あかりの路実行委員会(2006):第2回交流文化賞受賞作品紹介「歴史的遺産を活用したまちづくり～イベント「小樽雪あかりの路」を通じて～」、http://www.jtb.co.jp/chiiikoryu/koryubunkasho/02/bunka_01.asp

峯山富美(2008):日本建築学会文化賞受賞記念シンポジウム「小樽運河と石造倉庫群の保存運動から、何を受け継ぐか！」

堀川三郎(2010):市民講座「絆(きずな)と縁(えにし) <つながりを求めて>言葉・地域・地球・自然」法政大学社会学部・読売新聞立川支局共催

小樽学:まちづくり観光(1)～(3)小樽のまちづくり運動と観光(<http://otarugaku.jp/article>)

社団法人小樽観光協会:住民が共に育てる観光まちづくり.事例.01.北海道小樽市.<http://www.mlit.go.jp/>

掲載写真等

小樽の位置、小樽港と市街 http://www.city.otaru.lg.jp/sisei_tokei/otaru/profile/

小樽運河 <http://www.hokkaidoisan.org/>

小樽運河報道 <http://otarugaku.jp/img/upload/c4-5700-2.jpg>

北一硝子三号館 <http://otarugaku.jp/>

オルゴール館内部、小樽市街マップ http://www.city.otaru.lg.jp/kankou/koutuu_map/

雪あかりの路 <http://otaru.gr.jp/welcome/>

北のアイスクリーム屋さん <http://www.public-otaru.info/good-life/>

日本建築学会文化賞受賞記念碑 <http://sobaya-oyaji.jugem.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト

